



TOKYO
GEIDAI
the Year of
BEETHOVEN
2020/21

藝大プロジェクト2020

GEIDAI BEETHOVEN 250

～ベートーヴェン生誕250年記念～ 第2回

室内楽編曲で聴く ベートーヴェン

2020.11.1^土 15:00 開演 東京藝術大学奏楽堂 [大学構内]

※2020年12月2日より配信予定

〈Program〉

企画／レクチャートーク：沼口隆 (本学音楽学部楽理科准教授)

ベートーヴェン (C.ブルヒャルト編曲)：劇音楽《エグモント》序曲 op.84

(ピアノ連弾、ヴァイオリン&チェロ 三重奏編曲版)

L. v. Beethoven (arr. by C. Burchard) : Egmont Overtüre f-moll~F-Dur op.84 (Pf, Vn, Vc)

Sostenuto, ma non troppo へ短調 3/2拍子 ~ Allegro へ長調 4/4拍子

吉岡麻貴子 (Vn) 杉浦彩 (Vc) Duo Plaisir (大田佳弘&和田萌子) (Pf)

ベートーヴェン (J.アンドレ編曲)：《交響曲第5番》ハ短調 op.67

(ヴァイオリンとピアノ 二重奏編曲版)

L. v. Beethoven (arr. by J. J. André) : Symphonie Nr. 5 c-moll op.67 (Vn & Pf)

第1楽章 Allegro con brio ハ短調 2/4拍子

第2楽章 Andante con moto 変イ長調 3/8拍子

第3楽章 Allegro (attacca) ハ短調 3/4拍子

第4楽章 Allegro ハ長調 4/4拍子

吉岡麻貴子 (Vn) 沢田千秋 (Pf)

— 休憩 Intermission —

ベートーヴェン (F.リース編曲)：《交響曲第2番》ニ長調 op.36

(九重奏編曲版)

L. v. Beethoven (arr. by F. Ries) : Symphonie Nr. 2 D-Dur op.36 (2Vn, 2Va, Vc, Cb, Fl, 2Hr)

第1楽章 Allegro molto ニ長調 3/4拍子 ~ Allegro con brio ニ長調 4/4拍子

第2楽章 Larghetto イ長調 3/8拍子

第3楽章 Scherzo: Allegro ニ長調 3/4拍子

第4楽章 Allegro molto ニ長調 2/2拍子

永峰高志 (Vn) 大林修子 (Vn) 佐々木亮 (Va) 中村洋乃理 (Va) 向山佳絵子 (Vc)

笠原勝二 (Cb) 梶川真歩 (Fl) 日高剛 (Hr) 石山直城 (Hr)

本公演は科学研究費の助成を得て実施しています。(基礎研究(C)・課題番号18K00137)

※新型コロナウイルス感染予防対策に伴い、公演の開催・内容・出演者などは予告なく変更となる場合がございます。最新の情報を藝大ホームページでご確認ください。公演に際しては出演者・スタッフの体調管理、入場者数の制限や換気など必要な感染対策を取り実施いたしますが、ご来場のお客様にも「体調管理・手指消毒・マスク着用」など、感染対策へのご協力をお願いしております。なお「37.5度以上の発熱、咳・呼吸困難、全身の倦怠感その他体調に不安のある方」「新型コロナウイルス感染症陽性者との濃厚接触がある方」、「マスクを着用されない方」その他主催者の判断により入場をお断りいたします(感染対策の詳細は藝大のホームページ、会場掲示または当日配布のご案内などをご参照ください)。

国立音楽大学附属図書館の「ベートーヴェン初期印刷楽譜コレクションCollection of Early Printed Editions of L.v.Beethoven」は、ベートーヴェンLudwig van Beethoven(1770～1827)作品の1794年から1900年の間に出版された印刷楽譜、総計1,429点から成っている。そこには、作曲家生前の出版譜も500点余りが含まれている。

本日の演奏会は、この膨大な出版譜の中で、交響曲の編曲譜に焦点を当てて進めてきた研究プロジェクト「国立音楽大学『ベートーヴェン初期印刷楽譜コレクション』の精査と研究(1)」[科研費 基盤研究(C)(一般):18K00137; 研究代表者:沼口隆、研究分担者:沢田千秋、安田和信]の一環を成すものである。これらの編曲は、ベートーヴェンの作品を元にして作られたものではあるが、ベートーヴェン自身関わったものは、ほとんどなく、純粋な意味で「ベートーヴェンの作品」とは言い難い。一方で、演奏会の頻度も低く、録音など考えもつかない時代にあっては、ピアノや室内楽のための編曲は、楽曲を楽しむきわめて重要な手段であった。ベートーヴェンの「オリジナル」ではないとしても、19世紀にあっては、「作品像」に大きな影響を与える要素だったと言って良い。

本日の試みは、異なる編成による編曲を通して、そうした「作品像」の片鱗を体感してみようというものである。無論、我々は、もはや19世紀の耳で聴くことはできない。したがって、今日の「作品像」を、またひとつ豊かにしてみようという試みと考えていただいても良いだろう。

沼口 隆(音楽学・本学音楽学部楽理科准教授)

Program note

劇音楽《エグモント》序曲 op.84

「エグモント」は、オランダ独立戦争の初期に活躍した実在の軍人ラモラル・ファン・エフモント伯爵(1522～68)の名をドイツ風に発音したものである。ドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(1751～1832)は、彼を題材として戯曲『エグモント』(1787)を書いたが、この戯曲がヴィーンで上演されるにあたり、ベートーヴェンは付随音楽を委嘱され、序曲のほかに9曲を作曲した。

スケッチ研究からは、遅くとも1809年秋には着手していたことが分かっている。しかし、1810年5月24日の初日には間に合わず、楽曲付きで上演されたのは、通算で4公演目となる同年6月15日であった。

劇作品などとは無関係に、純粋に演奏を目的として書かれた序曲を「演奏会用序曲」と呼ぶ。ベートーヴェンの《コリオラン序曲》は、劇作品こそあるものの、当初から単独での上演を想定していた可能性が高く、しばしば演奏会用序曲の嚆矢と位置付けられる。《エグモント》に関しては、他の楽曲も創作されているので、厳密な意味での演奏会用序曲に分類するのは難しい。しかし、ベートーヴェンは最初から序曲のみを切り離して出版しており、早くも1814年には序曲だけで演奏された記録も残っている。これもまた、演奏会用序曲に限りなく接近している作品と見なすことができるだろう。

編曲者のカール・ブルヒャルト(1818～96)については、あまり詳しいことが分からないが、あるインターネットサイトでは、ピアノ編曲に限定して出版譜に関する膨大なデータを公開しており、それによればブルヒャルトのものは150にも及んでいる。そこではW.A.モーツァルトの作品が占める比率が高いが、J.S.バッハからR.ヴァーグナーに至る広範な作曲家が含まれており、出版社もブライトコプフ、ペーターズ、ショットといった現代にまで続くものも含めて、かなり多岐に亘っている。今回演奏されるものも含め、室内楽編曲も手掛けているので、傑出して仕事量の多い編曲家だったと見てよいであろう。

《交響曲第5番》(「運命」)ハ短調op.67

1808年12月22日のベートーヴェンの自益コンサートでは、交響曲第5番、第6番「田園」、ピアノ協奏曲第4番、合唱幻想曲が初演された。そのほかにもミサ曲ハ長調からの抜粋やコンサート用のシェーナとアリア《おお、不実なる者よ》などを含んだ4時間半にも及ぶ壮大な演奏会は、演奏の面では失敗に終わったと伝えられている。しかし、演目に照らして考えれば、ベートーヴェン全盛期の総決算と言っても過言ではない。いわゆる「傑作の森」は、さまざまな見解はあるだろうが、交響曲第3番に集中的に取り組んだ1803年からこの演奏会まで

の約6年間と見なすことが可能である。そして、当初は「6番」として告知された交響曲第5番は、その中でも中核を成すもののひとつである。

たとえば英語では、楽曲に関して「経済的economic」という言葉が用いられる。少ない素材から多様性が生み出されている状態であり、逆から見れば「多様性の中の統一」を意味し、西洋芸術音楽の中では非常に重要な美的基準となっている。「経済性」だけがベートーヴェンの特徴では決していない。しかし、彼がその点に際立った才を発揮したことは確かであり、彼の創作のイメージとも分かち難く結びついていもいる。第1楽章冒頭5小節、否、2小節のわずか4音を萌芽とし、4楽章の交響曲を構築したことは、文字通り記念碑的である。

ベートーヴェンが交響曲第5番に関して「運命はかくの如く扉を叩く」と言ったという話は、資料の改竄などによっていまや非常に悪名の高いアントン・シントラー(1795~1864)のみに由来するもので、信憑性はかなり低い。「運命」という言葉の問題性は、それにとどまらず、とかく個人と結びつけられる傾向にもある。あまつさえベートーヴェンの場合には聴覚障害との闘いと結びつきやすい。しかし、ベートーヴェンより40歳下のR.シューマン(1810~56)は、その時代にもなお、交響曲第5番とフランスの作曲家メユール(1763~1817)の交響曲第1番との近似を聴き取り、ベートーヴェンの音楽にフランス革命期の息吹を感じ取っていた。交響曲は、対象とする聴衆の数からして、公共性が高い。より普遍的なメッセージに耳を傾ければ、また別のものが聴こえてくることだろう。

編曲者のユリウス・アンドレ(1808~1880)は、ベートーヴェン作品なども出していた出版社ヨーハン・アンドレの同名の創業者(1741~99)の孫に当たる。オルガニストとして成功し、彼が著したオルガン教本は、複数回に亘って増版されたという。とりわけW.A.モーツァルトの編曲で知られ、ベートーヴェンの交響曲第5番では、第2楽章冒頭をオルガン用に編曲もしている。

《交響曲第2番》ニ長調 op.36

ベートーヴェンの時代のウィーンには、専用のコンサート・ホールはなく、演奏会にもオペラ劇場を使うことが多かった。オペラが休演となる四旬節の期間は、演奏会を開くのいうってつけであり、ベートーヴェンの交響曲第1・2番などの初演が、4月初旬になっているのも、そのためである。復活

祭に先行する四旬節は、キリストが40日間荒野で断食したことや、人類のために十字架にかけられたことを想起し、禁欲を心がけるため、派手な催しが控えられていたのである。

ベートーヴェンが交響曲第1番を初演したのは、30歳を迎える年だった。早期から才能を発露させた作曲家にしては随分と遅いが、同じ年のうちには交響曲第2番に着手している。第1番に手ごたえを感じ、定期的に演奏会を主催して、新作を次々に披露してゆくつもりだったのだろう。創作の手が止まったのは、時の皇后マリー・テレーゼ(1772~1807)の口添えで、1801年3月28日に初演されることになるバレエ《プロメテウスの創造物》のための音楽の委嘱を受けたためであった。しかし、1年後の初演を目指して、同年末には改めて作業に取り掛かり、1802年4月頃には、実際に初演できる状態にあったと考えられている。しかし、直前になって劇場の使用許可が下りなくなり、やむを得ず、初演はさらに1年の先送りとなった。

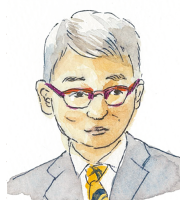
第2番は、次の第3番「英雄」があまりに壮大な作品であることもあってか、ベートーヴェンの交響曲の中では陰に隠れてしまいがちだが、1804年の『総合音楽新聞』は、第2番の初版に関して「深遠さと力と芸術への造詣を持った交響曲で、一風変わっていて巨大である」と評している。同時代人たちが、それまでにないような独創的で大規模な曲だと受け止めていたことは、改めて想起されても良いことかも知れない。第1番と比べると、演奏時間の総計は7~8分程度長く、短縮を提案する批評もあったほどに、当時の人々には長大に感じられたのである。

編曲者のフェルディナント・リース(1784~1838)は、ベートーヴェンがボン時代にヴァイオリンを師事したフランツ・リース(1755~1846)の長男で、1801年10月にウィーンの下に弟子入りし、その後の3年間は、秘書や写譜師としても師を助けた。1804年8月1日には、師のピアノ協奏曲第3番八短調op.37を自作のカデンツァによって演奏し、成功を収めている。1813年4月以降、およそ11年に亘ってロンドンに滞在し、ピアニストとして成功を収めた。また、ベートーヴェン作品のロンドンでの出版にも助力した。作曲家としても旺盛に活動し、膨大なピアノ作品のほかにも8曲の交響曲や26曲の弦楽四重奏曲など、充実した作品を残している。

沼口 隆

Profile

(楽器別出演順)



©Saeko Mizumoto

沼口 隆 (企画/レクチャートーク)

東京藝術大学准教授、国立音楽大学および桐朋学園大学講師。ドルトムント大学博士課程修了。専門は音楽学、主たる関心領域は18~19世紀のドイツ語圏を中心とする音楽、とりわけベートーヴェンとその周辺。学術論文・翻訳論文のほか、共著書に『よく分かるクラシックの基本』『楽譜をまるごと読み解く本』など、共訳書に『シカゴ・スタイル 研究論文執筆マニュアル』『ベートーヴェンの第9交響曲分析・演奏・文献』などがある。



©大窪道治

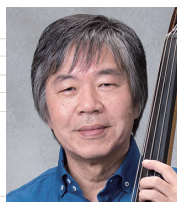
向山 佳絵子 (チェロ)

東京藝術大学を経てドイツ・リューベック国立音楽大学に留学。第54回日本音楽コンクール、第10回ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール優勝。出光音楽賞の他、多くの賞を受賞。アルゲリッチ、ギトリス等の一流演奏家とも共演。現在、京都市立芸術大学准教授。



吉岡 麻貴子 (ヴァイオリン)

東京藝術大学音楽学部を首席で卒業。安宅賞、アカンサス賞受賞。別府アルゲリッチ音楽祭、アフィニス夏の音楽祭、東京春音楽祭など、国内外の音楽祭、また、NHK『クラシック倶楽部』などにも出演している。現在、東京都交響楽団第1ヴァイオリン副首席奏者。



笠原 勝二 (コントラバス)

東京藝術大学卒業。江口朝彦氏に師事。1978年東京交響楽団に入団。入団後首席コントラバス奏者に就任し、2016年まで35年に渡り務める。現在も同楽団に在籍しながらソロ、室内楽、指揮活動等に取り組んでいる。



永峰 高志 (ヴァイオリン)

東京藝術大学卒業。NHK交響楽団首席奏者として活躍し、その功績により有馬賞を授与される。現在は国立音楽大学教授として教鞭をとり、ソリスト、室内楽奏者としても活躍。また、新日本フィルなどのオーケストラにゲストコンサートマスターとして招かれ好評を博している。



梶川 真歩 (フルート)

東京藝術大学、パリ・エコールノルマル音楽院、パリ地方音楽院を卒業。日本学生コンクールをはじめ、入賞多数。NHK交響楽団フルート奏者として活動する他、アンサンブルミクスト木管五重奏団、アウトリーチなどでも活躍中。桐朋学園大学、愛知県立芸術大学非常勤講師。



大林 修子 (ヴァイオリン)

長野県松本市出身。東京藝術大学卒業。徳永二男氏、故田中千香士氏に師事。在学中、「第50回毎日音楽コンクール」第3位。「第26回海外派遣コンクール」松下賞受賞。1989年NHK交響楽団入団。2017年有馬賞。現在同楽団第2ヴァイオリン首席奏者。



日高 剛 (ホルン)

東京藝術大学、オランダ・マーストリヒト音楽院にてホルンを学ぶ。広島交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、NHK交響楽団ホルン奏者を歴任。現在、東京藝術大学准教授。日本センチュリー交響楽団首席客演ホルン奏者。



佐々木 亮 (ヴィオラ)

東京藝術大学卒業。在学中に安宅賞受賞。1992年よりジュリアード音楽院入学。リンカーンセンターでリサイタルの他、ソロ、室内楽奏者として全米各地で活動。2003年帰国し翌年NHK交響楽団入団。2008年より首席奏者。桐朋学園大学、洗足学園大学にて後進の指導にあたる。



石山 直城 (ホルン)

静岡県出身。1988年武蔵野音楽大学卒業。1989年神奈川フィルハーモニー管弦楽団入団。2012年NHK交響楽団へ移籍、現在に至る。須山芳博、故田中正大両氏に師事。東京藝術大学非常勤講師。



中村 洋乃理 (ヴィオラ)

愛知県立芸術大学を経て、東京藝術大学大学院修士課程修了。第8回日本演奏家コンクール最高位受賞。2007年から2014年まで東京フィルハーモニー交響楽団フォアシュペーラーを務め、2015年NHK交響楽団入団。現在、次席奏者として活動中。



Duo Plaisir (大田佳弘&和田萌子) (ピアノ)

2008年結成。共に東京藝術大学大学院修士課程修了、ピアノソロ・デュオを角野裕氏に師事。第20回国際ピアノデュオコンクール、カワイ賞受賞などソロ、デュオ共に受賞多数。現在さまざまな演奏活動を行うほか、後進の指導にもあたっている。



杉浦 彩 (チェロ)

名古屋市立菊里高等学校音楽科を経て、東京藝術大学器楽科を卒業。これまでにチェロを林良一、山田知野子、三木敬之の各氏に、室内楽を漆原啓子、小林道夫の各氏に師事。東京フィルハーモニー交響楽団委託契約団員を経て、現在はフリーランスとして活動中。



沢田 千秋 (ピアノ)

東京藝術大学卒、同大学院博士課程修了。「ベートーヴェン交響曲リストによるピアノスコア」の演奏・論文にて博士号取得。主に故田辺緑、角野裕、土田英三郎の各氏に師事。東京藝術大学附属高校非常勤講師を経て、現在、国立音楽大学講師。

発行：2020年11月1日(日) 東京藝術大学

編集：東京藝術大学演奏芸術センター

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

TEL:050-5525-2465

イラスト・デザイン：水本紗恵子

※無断複写・転載・引用などを禁じます。